

基礎看護技術における採血実習の不安 —採血時・被採血時の不安反応の比較—

池田 敏子・徳永 順子・中西代志子・近藤 益子

The anxiety which students have during the demonstration.

Toshiko IKEDA, Junko TOKUNAGA, Yoshiko NAKANISHI, Masuko KONDO

We researched the anxiety which students had during the demonstration of taking blood samples.
We assessed the anxiety of both the role of nurse and the role of patient.
And we concluded as follows;

- 1 Students have this anxiety of both roles. However, the anxiety is greater when they take blood samples.
- 2 There is no correlation in their anxiety between the role of nurse and the role of patient.
- 3 The student who feels less uneasy can more effectively perform this procedure.

Key Words : 1 看護技術 2 採血 3 実習 4 不安 5 満足度

看護教育の中で多くの時間を占めている基礎看護技術の授業は通常、教室での講義に引き続いて学内実習という形式をとる。実習はその技術を実施する看護婦役と、される患者役という二つの役割を体験学習する授業を行っている。この実習の中で学生が最も印象深いとするものに採血の実習がある。本学では学生の健康自己管理としての血沈の目的も含め採血実習を行っているが、教官も緊張する実習であるが学生にとっては不安の強い実習である。

採血実習に関する不安の報告は先に鈴木¹⁾等によってなされているが、学生にとって看護技術の中でも不安の強いものであり、教官の個々の学生の不安傾向の把握と適切な援助の必要性を指摘している。

今回その採血実習の不安について看護婦役の時の不安と患者役の時の不安にわけて調査し両者の特長や関連について、また学生の授業に対する姿勢と不安との関連について等、追求し若干の考察

をしたので報告する。

対象・方法

対象は岡山大学医療技術短期大学部看護学科1年生81名全員とした。採血の講義終了時に採血実習に対する気持ちを不安を中心に自由記載させた。5日後、採血実習時は一教官が約15名の学生を担当し個人指導を行いその際、講義終了時のレポートで実施前の不安が強かった学生には特に注意して指導するとともに不安反応の観察を行った。また、実習終了直後、看護婦役、患者役の時の不安を、それぞれ表1の不安反応チェックリストをもちいて記述させた。この不安反応チェックリストは先に採血実習の不安を調査した鈴木らが Gail, W. S. と Sandra, J. S. が不安に関連する行動として示した生理的反応、心理的・情緒的反応、行動上の反応の中から観察可能な反応を選び決定した²⁾ 8項目を使用した。各項目は、「ない」から「ある」までを4段階で示し、それぞれに1~4点を与え

た。この総合計点を学生の不安反応得点とした。

表1 不安反応チェックリスト

	は ある つきり	か ある なり	い ある くら か	な い
1 手がふるえた				
2 身体がかたくなった				
3 顔がこわばった				
4 顔がカアッとした				
5 汗がでた				
6 涙がでた				
7 動作が止まった				
8 動作がゆっくりになった				

結 果

学習に対する姿勢は講義は熱心に聞いた44名、普通29名、あまり聞いてない5名、聞いてない1名、欠席2名であった。予習に関してはした29名、少しした41名、極少しした11名、しなかった者はいなかった。前不安では講義終了時のレポートでみると採血に対し強い不安を持つ者は10名、かなりある41名、少しある7名、ない20名であった。実習終了後の自分の技術に対する満足度としては、よくできた7名、まあまあできた50名、あまりできない20名、まったくできない4名であった。

実習時の看護婦役の不安反応得点は表2に示すように最も高い者で31点、低い者で9点、平均では19.9点であった。患者役の不安反応得点は最高26点、最低8点、平均では14点で、看護婦役の時

表2 役割別・平均不安反応得点

	不安反応得点	標準偏差	(最高点, 最低点)
看護婦役	19.9	4.1	(31, 9)
患者役	14.0	5.0	(26, 8)

の方が患者役の時に比べて不安反応得点は有意に高かった。看護婦役の時の不安を横軸に、患者役の時の不安を縦軸にとると、これら二つの不安の相関係数は0.208で、ほとんど相関はみられなかった。

①実習前の不安。②看護婦役の不安。③患者役の不安。④講義に対する姿勢。⑤予習の程度の5項目間での相関をみると①実習前の不安と②看護婦役の不安の間に相関係数0.35②看護婦役の不安と⑤予習の程度との間に0.22のわずかな相関がみられるのみで他の項目間には相関はみられなかった。

それぞれの役割を実施する順番と不安得点との間の相関は看護婦役ではみられなかったが患者役の順番間には相関係数0.24とわずかに相関の傾向を示し、先に患者役をする者ほど不安得点が高かった。

実習の実技に対し満足した群としなかった群、講義を熱心に聴いた群と聴かなかった群、予習をした群としなかった群とそれぞれ対立した二群にわけ各々の看護婦役の不安得点の比較は表3に示すように満足度ではした群は18.8、しない群は22.4でその差は有意であった。予習ではした群20.2としなかった群17.9でした群が不安得点が高かったが、両者の間には有意な差はなかった。講義に関しては両群とも20.0で差はなかった。

表3 授業に対する姿勢別、技術に対する満足度別平均不安反応得点

		人数	不安反応得点 (看護婦役)
満足度	した群	57	18.8
	しなかった群	24	22.4
予習	してきた群	70	20.2
	しなかった群	11	17.9
講義	よく聴いた群	73	20.0
	あまり聴かない群	6	20.0

考 察

1) 授業に対する姿勢

採血の授業は熱心に聴いたと答える者がクラス

の半数以上を占めている。授業終了時のレポートでは半数以上の者が不安を表現しているが、実習に関して消極的な意見はなく不安を持ちながらも頑張りたいと書いていた学生が多かった。予習に関しても90%近くの者がしたとの結果である。これらのことから学生は採血の授業に関して予想以上に熱心に取り組んでいるといえる。実施後の満足度では70%の者が出来た、まあまあできたと評価しており、まったく初めての高度な技術としては満足した学生は多いといえる。技術の実施に関しては注射針を人体に刺入することは強制していないが全員積極的に実施している。強制してないにも関わらず血液が取れなかった時の学生のショックは大きく、そのために泣いたり、気分が悪くなる学生もいる。多くの学生が技術といえるものはまだ備わっていないが、たまたま成功した者と失敗した者とは気持ちに大きな差が出てくる。採血は特に血液がとれた、とれないと誰の目にもはっきりわかるため学生のショックは大きいと考えられる。この実習は血液を採取することは強制ではないが教官は安全、正確な手技の指導はもちろんのこと学生が採血しやすいよう患者役の条件を整え、実習に対し積極的な学生達に教官は答えるようにしたい。そして初めて経験する技術に厳しさと同時に満足感をもたせる必要があると考える。

2) 実習の不安に関して

看護婦役の不安は患者役の不安より有意に高い。不安は一般的に、散漫で不快な漠然とした懸念、神経質、あるいは身心に表出する恐れ感情として定義されている。多くの研究者らは、不安は、恐怖のように、脅威に対する反応であるが、しかし恐怖とは違って、既知の、はっきりした、そして外的・直接的な危険に対する反応ではなくて、未知の漠然とした内的な、未来における何物かから受ける脅威として感じられるものであると考えている³⁾といわれている。この定義からみても採血実施は不安反応を起こす条件を備えていると言える。採血をすることは学生にとっては全員が初めての経験である。学生のレポートにはうまく血管に入るだろうか、相手が痛くないだろうか、事故

がおきないだろうか等の不安が多く記述してあった。このように初めての経験であること、人体に針を刺すという日常的には考えられない行為であること等が不安を強くしていると思われる。

また教官に評価される状況も不安が強くなると前出の鈴木等は述べているが、技術テストの時にはそのような傾向を感じるが採血の実習に関しては教官がついていてくれたから安心して採血ができたと記述する学生が多くみられた。

今回の実習では前不安の強い者をチェックし、その学生を担当する教官に事前に報告したが、教官による不安反応の観察によると、前不安の強いものが特別な反応を示したり、特別な援助を必要とすることはなく不安を持ちながらもほぼ全員が同様な実習ができていた。

しかし強度の不安は学生がよく口にするような「頭が真っ白になった」の表現のように思考能力が中断され、周囲が見えなくなると考えられる。このような状態では人を対象にした看護技術を行う事は困難となる。よって、強い不安をもつものは事前にチェックし対処することが必要となる。今回事前の不安のチェックは自由記載のレポートで判断したが前不安のレベルをチェックする方法も検討する必要があると思われる。

患者役の不安は患者という役はすでに本物の患者を体験している者もかなりいると考えられる。また献血等で初めての経験ではない事もある。この点は看護婦役と異なるところである。また少し痛いがそれだけ我慢すればいい、それ以上のことは起こらないと学生のレポートにあるように、注射針を刺入することにより起こる状態を冷静に受けとめている学生が多かったこと等により不安反応得点も低くなっていると思われる。

平均点でみると患者役の不安反応得点は看護婦役の不安反応得点より低い。しかし3名の学生は患者役の不安について、本当に恐かった、看護婦役の方がまだよかった、とレポートした。これらの学生の看護婦役、患者役の不安得点を比べると、全体の平均とは逆で、患者役の不安得点の方が看護婦役の不安得点よりも高い値を示していた。このような値を示す学生は14名もいた。そして実際、

この学生の中で採血される直前に顔面蒼白、気分不良となったもの1名、採血終了後気分不良となったものが1名でベッド安静の処置を要した。

そのような患者役の学生の中には自分の未熟さを知っているがゆえにその自分と同様な未熟な学生が採血をする、無菌操作でしてくれるだろうか、血管に入るのか、痛くされないだろうか等、様々な不安が一気に現れ身体反応を起こした結果と考えてよいのではないと思われる。従って不安反応得点としては高くはなかったが看護婦役の学生の未熟さが与える患者役の学生の不安に関して充分注意しながら実習指導を行う必要がある。

看護婦役、患者役の両者の不安反応得点に相関が見られなかったことは二つの役割がする立場、される立場とまったく反対の体験であることから、その人のそれまでの経験等に影響されそれぞれ独立した反応をしていると考えられ、同一人物でありながら立場が変わると同じような反応をするとは限らないのでそれぞれの役割において、その学生の反応を注意深く見守り指導することが必要といえる。

3) 授業に対する姿勢等と不安との関連

結果で述べたように5項目間の関連は事前の不安が看護婦役の不安とやや相関する事から、看護婦役の不安は前調査からある程度推測されるといえる。しかし患者役の不安との関連はどの項目にもみられなかった。患者役の不安がわかる様な前調査を更に検討するとともに実施時、患者役に充分注意を払うことが必要であると思われる。

予習の有無と看護婦役の不安の関連は相関係数0.22でやや相関がある。不安得点での比較では予習をしてきたほうが不安が強くてたが得点に有意な差はなかった。この結果からは両者の関連は明かではない。講義に関してはよく聴いた、そうでないの両方とも不安得点は同得点であった。不安の度合いによって講義に対し積極的になったり、予習をしてきたりする結果につながるのではないかと、また予習が自信となるのでないかと等と予測していたが、この授業においては、それらのことは相関関係においても不安得点の差においても関連はあまりないようだ。

実習に対し満足している者は看護婦役の不安得点の平均値は満足していない者のそれに比して有意に低いことから、不安の少ない学生の方が実技に関して満足を感じやすいといえるかもしれない。この結果から満足感を得る一つの因子として不安はできるだけ軽い方がよいと考えられる。看護技術の授業は積み重ねであるが、短い時間の中で多くの技術の習得を目標とすると、どの授業も初めての技術となることが多い。初めての技術では学生の行う手技に差はほとんど無い。自分自身の技術を客観的に振り返ることも困難である。全く初めての技術においては教官の手取り、足取りの指導を受けながらもまず自分にもその技術が出来たんだという満足感・達成感を持ってもらいたいと考える。そのためには不安の高い学生をチェックし事前から関わり不安を軽減していくことは実習に関する満足感を増すという点では重要と考えられる。

結 論

採血実習における不安を学生役割の採血者、被採血者の両面から調査し各々の特長と両者の関連、また授業に対する姿勢等と不安との関連で検討した結果以下のことがわかった。

- 1 採血実習の不安は採血時、被採血時のそれぞれの不安があり、採血時の不安の方が有意に高かった。
- 2 採血時の不安と被採血時の不安は相関しなかった。
- 3 採血の実技に満足したとする者は、採血時の不安反応得点が満足しないとする者より有意に低かった。

文 献

- 1), 2) 鈴木志津江, 津田紀子, 川畑摩紀枝, 宮脇郁子, 神谷和代, 中西康弘, 細川順子, 新田麗子, 矢本美子, 松本比佐江, 渡辺和子, 野崎香野:看護学生の採血実習に伴う不安反応に関する研究. 神大医短紀要 6: 85-89, 1990.
- 3) Henderson. V., Nite. G.; 荒井蝶子, 辛嶋佐代子, 季羽倭文子, 小島操子, 近藤潤子, 田島桂子, 野島良子, 波多野梗子, 樋口康子, 外間邦江, 松本登美, 南裕子,

矢野正子訳：看護の原理と実際Ⅴ 症候と看護。メジカルフレンド社，東京，169，1980。

4) 三浦麗子：注射の学内実習における学生の不安に関する

援助について—STAIによる学内実習前の不安と知識，技術，態度の関係を調査して—。第20回日本看護学会集録（看護教育）215-217，1989。